

「眉間尺」試論

—— 魯迅『故事新編』世界の一 ——

松岡 俊裕 著 松岡 俊裕 訳

キーワード：眉間尺 鑄劍 復讐 碧血 秋瑾

本稿の主たる目的は、魯迅の歴史小説「眉間尺」（1927年4月3日。1935年に『故事新編』に収めた時に「鑄劍」に改名）に描かれた作者の“報仇”（復讐）観の解明にある。¹

「眉間尺」のみならず、『故事新編』諸篇は多様な色使いがその芸術性を高めている。では「眉間尺」で描かれた“報仇”を、色で喩えると何色か。

1. 「眉間尺」執筆前の魯迅における“報仇”の歴史

民族革命に対する一文学者としての貢献

清末期に魯迅は改良主義の道から民族革命の道へと歩みを進め、専ら文学による国民性の改造を通じての民族革命の達成と民主共和国の実現を図った。民族革命の中心課題の一つは満州人王朝、清王朝への“復仇”（復讐）、つまりその打倒と漢民族国家の再建である。ただ魯迅と交遊のあった日本人学徒増田渉の回想（「魯迅の印象」）によれば、魯迅は清末に革命運動に従事していた時（日本留学期のことか）、ある要人（来日した清朝政府の要人か）の暗殺を命じられたが、自分の死後の母親魯太太の行く末が気がかりであった魯迅はいざ出発という段になって「母親をどうしてくれるかハッキリきいて置きたい」と申し出たため、「そんなアトに心が残るようではダメだからお前はやめろ」ということになり暗殺役を降ろされた。それは或いは“臆病”と言うことも可能であろう。その代わりに魯迅は、先ず医者になって中国人の肉体を強靱なものにすることに（“健全な肉体”造り）、次いでその国民性の改造（“健全な精神”造り）のための文学活動に打ち込むことに、革命に於いて自分の果たすべき役割を見出したのである。

“歴史復仇小説”「スパルタの魂」の創作

魯迅の最初の小説、日本留学時代に書いた、寄せ集め翻案作品「スパルタの魂」(1903年。『集外集』所収)は、敵ペルシャとの戦いの最中眼病を患い入院して生還できた夫アリストデモスを、己れの死を以て諫め再び従軍させた妻“湊烈娜”(月神[女神]Selene または死者を冥界に送る女神 Seiren。作者がこの名で表わそうとしたのは後者か)を顕彰した“歴史諫死小説”であるが、同時に敵のペルシャ(実は清朝)への“復仇”を描いた“歴史復仇小説”という性格をも持っている。その“復仇”の大きな特徴は、戦いに敗れた祖国や国民への“愛”の故というよりも、祖国や国民のために“戦死”することを“武士”個人の“名誉”と“栄光”と見なすが故の“復仇”であり“恥辱”を恐れるが故の“復仇”である点である。また、その機軸を“健全な肉体”造りから“健全な精神”造りに移した後、魯迅は論文「摩羅詩力説」(1908年。『墳』所収)で、圧制者に対する“反抗”と“復仇”を唱える19世紀欧州のロマン派民族詩人たち(“復仇”詩人バイロン等)とその声(『海賊』等)を紹介した。

魯迅の将来の夢は、中国を舞台にした中国自前の“歴史的復仇小説”の執筆であり、中国自前の“復仇詩”であった(実は「スパルタの魂」には、“復仇詩”ならぬ“国民のために戦死したのだとの叫び声”[言ってみれば“頌戦死詩”]、“国民のために戦死するとは大変な栄誉だとの叫び声”[これも言ってみれば“頌戦死詩”]、“生還を咎める軍歌”が書き込まれている)。魯迅にとっては、とりあえずそのことが、実際の革命が成就する前の、清朝に対する“復仇”であり、革命に命を落とした者、例えば同郷の徐錫麟、秋瑾たちのための“復仇”でもあった。しかし少年時代に“憂剣生”の筆名を使用したことのある魯迅は、いざ革命戦争の際には剣を手にとって戦陣に加わる覚悟はできていたに違いない。

“罪の意識”がもたらした“復仇”の内在化と“自己喪失”

意外に早く到来した辛亥革命の成就と中華民国の成立で、一旦“復仇”は果たされたかに見えたが、すぐさま期待は裏切られ、袁世凱の軍閥暗黒政治の下で、再び少なからぬ革命家が命を落とした。秋瑾への“復仇”を誓った王金發も、なんと自分が解き放った秋瑾殺害の関係者に暗殺された。新たな“復仇心”が人々の心中に生まれたが、軍事政権の圧制下で事実上“復仇”の道も閉ざされ、魯迅も、自分も“旧社会”(“食人社会”)の一員であり“復仇”の対象の一人であるという、所謂“罪の意識”²に強く囚われる。当時の魯迅の“寂寞”の一つの側面は、時代の“閉塞状況”と自身の“罪の意識”による“復仇”の内在化と隠蔽であり、“自己喪失”であった。この“自己喪失”の時代は暫く続き、新たに“自己欺瞞”と故意の“希望”が加わった呐喊期、つまり五四期や五四退潮期に於ても事情は変わらなかった。“敗北者”(「狂人日記」の“狂人”や「不周山」の女媧等)や“復仇される者”(菊池寛の「三浦右衛門の最後」の右衛門や「ある敵打の話」の鈴木八弥等)への関心と“復仇心”の埋没とは表裏の関係にあった。“復仇心”の埋没により、当時の魯迅は“復仇する者”に対してさほど関心がなく、このことも彼が森鷗外と芥川龍之介の作品ではただ前者の「沈黙の塔」、「あ

そび」と後者の「鼻」、「羅生門」だけを翻訳し、両者の“復仇”小説、例えば前者の「護持院原の敵討」と後者の「或日の大石内蔵助」、「或敵打の話」等は一篇も翻訳しなかった原因の一つとなった。

“復仇”される者から“復仇”する者へ — “自己回復”への道 —

魯迅の中で“復仇心”が滾り出すのは、1924年に始まる北京女子師範大学の学園紛争と、『現代評論』派文人たちとの論争以降のことである。加えて、ダーウィンの進化論の影響下に生まれたフロイト精神分析学による文学理解を否定的に乗り越えた、人生で経験する様々な“苦悩”が優れた文学を生むという、“苦悩”や“苦悩”をもたらすところの個人が抱える“矛盾”した感情、考えそれ自体を肯定的積極的に評価する厨川白村の文学理論(『苦悶の象徴』)を学習し、翻訳することで、“自己回復”もゆっくりとかつ着実に魯迅の内部で進行した。例の、魯迅に言わせれば安禄山との姦通を疑い愛の冷めた玄宗によって“復仇”(殺害)されたという、楊貴妃にスポットを当てた小説(または戯曲)の執筆放棄(1924年)も、西安の自然環境に幻滅したからではなく、“復仇”される者から“復仇”する者へと、魯迅の関心の所在がシフトした結果と理解すべきである。更に翌1925年の“五・三〇”事件、1926年の、教え子も殺された“三・一八”事件を経て、“報仇[復讐]心の復活”と“自己回復”はほぼ完成する(この時期あたりから、魯迅は文語“復仇”の使用をやめて口語“報仇”を使い始める。ただし“報復”の使用状況に変化はない)。

こうした“復活”或いは“回復”は決して“古い自己”の単純な“再生”ではなく、“古い自己”の“新しい再生”であり、喩えて言えば“古い瓶に新しい酒を入れる”であって、別な角度から見れば“新しい自己の認識と発見”、“古い自己の新認識と新発見”とも言える。魯迅が自分の少年時代を回顧して書いた『朝花夕拾』各篇の副題は正しく「旧事重提」であり、中国の古代を回顧して書いた「眉間尺」の副題は正しく「新編の故事」であった。

2. 「眉間尺」の執筆

“報仇”の循環の鎖を切断するロジック

小説「眉間尺」の執筆は、その“報仇心の復活”と“自己回復”の完成を象徴するものの一つである。「眉間尺」と魯迅が青年時代に書いた“歴史報仇小説”「スパルタの魂」とは似た一面を有しており、彼が「眉間尺」を書いた時、「スパルタの魂」が脳裏に浮んでいた筈である。「眉間尺」は、かつて青年魯迅が夢見た「スパルタの魂」の中国版“歴史的報仇小説”であり、第二の「スパルタの魂」(または「スパルタの魂」の姉妹篇)と言える。しかし、主体がやや曖昧な、国家民族レベルの、大げさな“報仇”ではなく、あくまでも一個人の“報仇”である点、祖国や国民と関わりのある“名誉”、“栄光”、“恥辱”とは無縁の、単に国王に殺された父親への“愛”にのみ基づく“報

仇”である点、描き方が史実や史書に比較的忠実な“歴史報仇小説”ではなく表現豊かな幻想的象徴的“歴史的報仇小説”である点、“報仇”の循環の鎖の切断のロジック（自分が“報仇”の対象となるのを防ぐため、たとえ“報仇”に成功しても自らも命を絶つ、という考え。この考えは、最初はたぶん劉向の「孝子伝」等から啓示を得、その後日本の池田大伍が自ら日本語訳した「楚王鑄劍記」に基づいて改作した童話「眉間尺」〔池田大伍編『支那童話集』（富山房、1924年）所収〕³を読んで確信を持つに至ったものと思われる）が見事に貫かれている点など、作品の出来映えとそれを支える作者の力量は「スパルタの魂」の水準と該作品執筆時の作者の水準を遥かに越えていた。

この“報仇”の循環の鎖の切断のロジックにより、“眉間尺”と“黒色人”（黒い男）はどちらも自分が“報仇”の対象になるのを避けるため、“報仇”を実行する前に自ら自分の命を絶つ。大王は“黒色人”に雄の青劍で首を刎ねられる。その雌雄の青劍は、いずれも王妃が一度鉄柱を抱いてから孕んで生み落とした青く透明な鉄の塊を用いて鑄造したものであり、大王の実の子供ではないが、大王の子供の一人ではある。雄劍は男の子であり、雌劍は女の子である。

他に、この“報仇”の循環の鎖の切断のロジックを表わしているものに、“眉間尺”、大王、“黒色人”の三人の頭が一つの鼎で一緒に煮られる場面があり、これは“烹煮”に相当する。“烹煮”は古代の嚴刑の一つであり（“鑊烹”、“鼎鑊”、“湯鑊”とも言う）、人を煮る大鍋を古代では鼎（三本足）或いは鑊（無足）と言った。三人が“烹煮”という嚴刑を受けたのは、大罪を犯したからである。その大罪とは、他人に殺人を依頼したか、或いは家臣に殺人を命令したか、或いは他人から殺人を依頼されたかである。

“烹煮”と言えば、魯迅の筆名の一つ“宴之敖者”のことが思い合わされる。魯迅がこの“宴之敖者”を筆名として使うのは一度限りである。1924年9月、魯迅は『俟堂磚文雜集』を編纂した時、題辭の後に筆名“宴之敖者”を記した。この筆名の意味は家中の“驕傲”（傲慢）な日本婦人ということであり、魯迅はこの筆名を用いることで二弟周作人の日本人妻、羽太信子を諷刺した。小説「眉間尺」の中で“黒色人”は国王の面前で自ら“宴之敖者”と称するが、遺憾ながらこれまでどの専門家も作者がなぜ“黒色人”に大王に対して“宴之敖者”と名乗らせたか明確に説明していない（「臣名叫宴之敖者」〔「臣は名前を宴之敖者と申します」〕）。もし小説中の“宴之敖者”を羽太信子と理解するなら、ここの意味は通らなくなる。ひょっとしたら“宴之敖者”の“宴”字は宴会、酒宴の“宴”、或いは“玩把戲”（大道芸を見せる）、“演把戲”（同左）の“演”かも知れない。筆者は後者ではないかと考える。そして“敖”字は“驕傲”の“傲”字ではなく、下に四点のある“煎熬”（煮出す）の“熬”（煮る）であろう。“宴之敖者”とは要するに、“見世物として煮られる者”という意味である。作者はここで、“黒色人”がほどなく“演把戲”、“烹煮”を準備して実行することを暗示しているのである。

また、鼎の中で“眉間尺”、大王、“黒色人”の三人の頭が互いに咬み合うのは、古代の嚴刑“獸咬”（猛獸を放って人を咬ませるか、或いは人を猛獸に投げ与えて咬みつかせる）の一種と見ることもできる。

だがこの“報仇”の循環の鎖の切断のロジックは、実際は実行するのが極めて難しい。このロジックには、実は中国はどうあろうと仇を見極め命がけで戦い徹底的に“報仇”するべきであり、さもなければ中国は救助を得られないであろうという、魯迅の深い認識が込められているのである。魯迅は作品の中で“循環報仇”（報復の循環）という言葉を一語だけ使っている。1933年「ご婦人たちでも駄目だ」（『集外集拾遺補編』所収）の中で中国が“循環報仇”を切断できないでいる状況に対して、魯迅は憤りかつ諷刺して「如果認清冤家、又不像娘兒們似的空嚷嚷、而能够扎实的打硬仗、那也許真把愛打仗的男女的種都給滅了。而娘兒們都大半是第三種；東風吹來往西倒、西風吹來往東倒、弄得循環報仇、沒有個結帳的日子」（「もし仇をはつきり見分けて、ご婦人たちのように空騒ぎすることなく、手堅く激戦を戦い抜くことができれば、ひょっとしたら戦争を好む男女の種を本当に消滅させられるかもしれない。しかし、ご婦人たちの大半は第三種[中間派]であり、東風が吹けば西に倒れ、西風が吹けば東に倒れ、交互に復讐し合って、帳簿を締める日が訪れない」と記している。

“黒色人”の故郷“汶汶郷”について

“黒色人”は国王に対して“宴之敖者”と名乗ってから、「汶汶郷で生まれ育ちました」と語った。人民文学出版社版『魯迅全集』の原注には「汶汶郷は作者が作った地名。汶汶、昏暗不明の意」とある。この説明によれば、この“汶汶郷”は中華民国の暗黒世界を諷刺した言葉ともとれる。しかし“汶汶”には“玷辱”（辱しめる、恥辱）の意味もある。例えば『楚辞』「漁父」篇に「安能以身之察察、受物之汶汶者乎？」（「どうして曇りなき潔癖な身を以て、暗く汚れた[汚された、辱しめられた]物を受けることができようか」とあり、後漢の王逸の該篇注に「蒙垢塵也」（「恥を顧みない[構わない]こと」とあり、宋代の洪興祖の該篇注に「汶、濛、玷辱也」（「汶は、濛であり、恥辱を受ける[受けさせる]こと」とあり、明代の帰有光の「答周淀山書」に「玉摧壁毀、汶汶以没」（「玉壁が打ち砕かれるように先賢や美人は亡くなりましたが、彼らは辱めを受けて没したのです）」⁴とある。“玷辱”、“蒙垢塵”と言え、私たちは古代の越王勾踐の物語、“会稽の恥”の物語で有名な越国、つまり紹興のことを想起せざるを得ない。明末の紹興府山陰県の人、王思任は、清軍による南京攻略後、明朝の宰相馬士英が浙江に逃げて来た時、馬を罵った手紙の中で「夫越乃報仇雪恥之國、非蔽垢汚之地也」（「そもそも越は復讐して恥を雪いだ国であって、汚れ[恥辱]を有している地ではない」と述べている。中華民国期の北京も“玷辱”、“蒙垢塵”の地と言えるので、“汶汶”はやはり中華民国の暗黒世界を諷刺した言葉とも理解できる。他に、南宋の大臣、文天祥が、元軍が首都臨安を攻略した後、引き続き南方で抵抗し続けたが、戦いに敗れて捕虜となり、3年監禁されてから殺されている。この文天祥の号は文山であり、“文文山”の発音は“汶汶郷”の発音によく似ている。魯迅は“黒色人”の故郷を“汶汶郷”と命名した時、文天祥のこともその脳裏に浮んでいたのかもしれない。

“黒色人”は何者か — 一種の分身現象 —

ところで謎の登場人物“黒色人”は、実は少年“眉間尺”に止めを刺されずに命を助けられた“紅鼻子”（赤鼻）の黒“老鼠”（鼠）が変身した、“眉間尺”のもう一つの人格を示す。実を言えば“眉間尺”の名は“赤鼻”であり（劉向『孝子伝』、曹丕『列異伝』等。“赤比”、“赤”とも書く。『孝子伝』には「眉間赤名赤鼻」[「“眉間赤”、名を“赤鼻”と言う」]とある）、“老鼠”の鼻は橙褐色或いは赤褐色であるので“赤鼻”であるとも言える。従って“紅鼻子”の黒“老鼠”は“眉間尺”でもあるから、この“黒色人”は“眉間尺”でもあるということになる。“黒色人”は“眉間尺”に替わって国王に“報仇”する使命を引き受け、交換条件として“眉間尺”に頭と剣を差し出させるが、その瞬間、“眉間尺”は“黒色人”が他ならぬ自分であることを悟り、あたかももう一人の自分がその使命を引き受けるかのように「挙手向肩頭抽取青的劍、順手従後項窩向前一削、頭顱墜在地面的青苔上、一面將劍交給黒色人」（「手を挙げて肩から青い剣を抜き取ると、そのままぼんの窪から前にさっと削いだ。首が地面の青苔の上に落ちると同時に、剣を“黒色人”に渡した」）。つまり“黒色人”が“眉間尺”を励ましてその“報仇”を助けるのは、“老鼠”（“黒色人”）が命を助けてくれた“眉間尺”に恩返しするということであり、同時に“眉間尺”が自らを励ますという意味を持つ。これは一種のドッペルゲンガー（二重身）現象的描写であると言え、加えて“眉間尺”が作者魯迅の分身であるとする、この“報仇”物語は、“眉間尺”と魯迅の“報仇”を描いた物語であると同時に、“眉間尺”と魯迅がいかにか“自己回復し”“新しい自己を発見した”かを描いた物語であるということになる。

魯迅の“油滑” — “紅鼻子”と“乾癩臉少年” —

魯迅の諷刺精神は、この小説に於ても充分發揮されている。魯迅はある時、民俗学者顧頡剛に“紅鼻子”（赤鼻）という渾名をつけた。周知のように、魯迅は「眉間尺」の中で“眉間尺”は「近来很有点不大喜歡紅鼻子的人」（「近頃あまり“赤鼻の人”を好まない」）と記しているが、これはどうやら秘かに顧頡剛を諷刺したもののようである。この“紅鼻子”は本作品では他に“老鼠”の“尖尖的通紅的小紅鼻子”（尖った真っ赤な小さな赤鼻）、“尖尖的小紅鼻子”（尖った小さな赤鼻）として登場する。魯迅は本篇を書き上げた日（1927年4月3日）の日記に「作眉間赤訖」（「“眉間赤”を書き上げる」）と記している。上述したように、『孝子伝』によると鑄劍工の“干将”、“莫邪”の息子は“眉間赤”と言い名を“赤鼻”と言う。ならば日記の“眉間赤”は一体何を指しているか。恐らく単に作品名を指しているだけでなく、同時に顧頡剛を指しているとも言えよう。公開の“油滑”（ふざけ）ではなく日記上の“油滑”でしかないが、これも一種の“油滑”である。いずれにせよ日記の“眉間赤”は“眉間尺”の誤記ではない（魯迅がこの“報仇”物語に『眉間尺』と名づけたのは、恐らく池田大伍翻訳改編の「眉間尺」（前出）から直接啓示を得たのであろう）。魯迅が2年前の1925年3月18日に書いた「示衆」（「引き廻し」）（『彷徨』所収）に「赤膊的紅鼻子胖大漢」（「半裸の赤鼻のデブ大男」）を登場させたのも、密かに顧頡剛を諷刺したのかもしれない。

魯迅が顧頡剛につけた鼻に纏わる渾名は、“紅鼻子”以外に、“鼻”、“像形鼻”（鼻もどき）、“朱山根”（赤い鼻柱）、“山根”（鼻柱）、“三根”（鼻柱。「三」と「山」の中国音はよく似ている）等がある。

“老鼠”と言え、私たちは魯迅が“隱鼠”（モグラ）等の“老鼠”を好み“老鼠”を襲う猫を憎んだ話を思い起こさざるをえない。魯迅が鼠を好み猫を憎んだことを端的に示している文章は、1926年2月26日執筆の「犬・猫・鼠」（『朝花夕拾』所収）である。“老虎”（虎）と猫とは血縁関係があり（魯迅も該文で祖母が魯迅少年に「猫是老鼠的先生」[「猫は鼠の先生です」]、「猫是老鼠的師父」[「猫は鼠の師匠です」]と話してくれたことを紹介している）、魯迅が該文で猫に対する激しい憎悪を示したのは、実は“老虎”即ち『老虎報』（『甲寅』雑誌のこと）と該雑誌の創始者たる、段祺瑞軍閥政府の教育総長、章士釗（渾名を“老虎総長”と言う）を間接的に批判するためであったのかもしれないし、更には渾名を“北洋之虎”と言う段祺瑞を間接的に批判するためであったのかもしれない。周作人の当時の自選隨筆集の一冊『談虎集』（1928年）の“虎”とは、正に章士釗や『老虎報』のことである。

ここで“眉間尺”に纏わりつく“乾癩臉少年”（干からびて皺くちや顔の少年）を取り上げることにしよう。この“纏わりつく”場面は、後掲の宋代の小説「任願」に由来するものとみられるが、“乾癩臉少年”命名の由来について説明した専門家はいない。“癩”の基本義は“凹下去、不飽滿”（凹んで萎びている）であり、“乾癩”は“乾巴”に同じく“干からびて皺くちや”の意味。“乾癩臉少年”に似た言い方に“小癩三”、“癩臭虫”がある。前者の“小癩三”は元来が南方方言であり、その意味は“小流氓[ゴロツキ]”、“チンピラ”、上海語で shyobeisei と発音し、“癩三”、“必山”とも言う。彼らは通常極めて痩せ細っているという。魯迅が1935年1月25日に増田渉に寄せた日本語の手紙に「癩、一番訳しにくい。最初の意味は『ペッチャンコ』の風船玉が、中の空気が四分の三まで漏れる時の有様を形容する時にこの字を使う。引伸して精神萎靡を形容し、又、人の愉快でない時の有様、飢餓した腹を形容す。上海語。又『小癩三』という言葉あり、これは無能で零落し、まさに乞食になろう人なり。併し乞食になれば正式の乞食の称号を得て小癩三の類からのぞかれる」とある。後者の“癩臭虫”は、例えば小説「離婚」（1925年11月6日、『彷徨』所収）の中に“癩臭虫”に似た“尖下巴少爺”（顎の尖った若旦那）が登場する（「還有幾位少爺們、因為被威光圧的像癩臭虫了、愛姑先前竟没有見」[「他に若旦那が何人かいた。しかし威光に押されて腹を空かした南京虫のように小さくなっていたため、それまで愛姑の眼に入らなかったのである」]、「七大人又不可靠、連尖下巴少爺也低声下氣地像一個癩臭虫、還打“順風鑼”」[「七大人も頼りにならない。顎の尖った若旦那すら、腹を空かした南京虫のようにペコペコして“おべんちゃら”を言っているのだから」]）。魯迅は郭沫若等創造社の人々、とりわけ成仿吾の“才子+流氓”のやり口、習性を嘲笑した（例えば1931年7月20日「上海文芸の一瞥」。『二心集』所収）。“乾癩臉少年”も成仿吾かもしれないが、遺憾ながらここでは正確な解答を紹介することはできない。ついでながら、魯迅が“癩三”と同列視していた“[洋場]悪少”（[上海の]悪少年[若旦那]）（例えば1936年6月6日「文壇三戸」。『且介亭雜文二集』所収）は施蟄存である（施蟄存には“遺少”

[所謂“遺老”を振った言い方]という渾名もある)。“乾癯臉少年”は結局誰のことなのか。

“青”は“報仇”の色 — “碧血”と秋瑾 —

ここで筆者は冒頭で提出した質問に自ら回答することにする。“青衣”、“青劍”、“青光”が示す青色は、無実の罪で殺害された人、つまり“眉間尺”の父親が流した血(赤色)の変色後の色である。『莊子』「外物篇」、『呂氏春秋』等に記載されている萇弘の物語によると、東周の春秋時代のこと、萇弘は蜀の君主に諫言したが受け入れられず自殺したが、3年後その血は“碧玉”(青緑色或いは青白色の玉)に変わったという。のち“碧血”(“青血”とも言う)は、忠烈の士、国のために犠牲になった人と無実の罪で殺害された人の流した血もしくは彼らの志を指すようになる(ちなみに「丹心碧血」[「忠烈の志を持った人物が殉難すること」]という成語がある)。⁵

前者は、例えば、宋の梅堯臣「過開封古城」詩に「漢兵墮銅鏃、**青血**為土花」とあり、元の鄭元佑「汝陽張御史死節歌」に「孤忠既足明丹心、三年猶須化**碧血**」とあり、明の辺貢「謁文山祠」詩に「黃冠日月胡雲斷、**碧血**山河龍馭遙」とあり、『明史』列伝第154「周鳳翔」に引く周鳳翔の辞世詩に「**碧血**九原依聖主、白頭二老哭忠魂」とあり、清の魏麟「於忠肅祠」詩に「丹心縱死還如鉄、**碧血**長埋未化磷」とあり、清末の陳去病の宋の烈士文天祥を憶詠した「重過西台尋謝臯羽墳不得、返舟獲巨鯿一頭、食之甚肥」詩に「荒江但聽寒潮漲、頽字誰將**碧血**鐫」とあり、清末の雷昭性の黄花岡七十二烈士を弔った「哭広州殉義諸烈士」詩に「万古玄珠沈赤水、千年**碧血**灑黃花」とあり、清末の辛亥武昌起義後に逮捕され殺害された熊朝霖の「絶命詩」に「不然且比**青磷血**、風雨帰来認故吾」とあり、中華人民共和国期の高雲覽『小城春秋』第33章に「今後自当努力報国、灑**碧血**於疆場、为国家民族尽孝」とある。後者は、例えば、清の陳維崧『減字木蘭花』「題山陰何奕美小像」詞に「伝家**碧血**、怕聽子規啼夜月」とあり、清の陳夢雷「擬古十九首序」に「歌以当哭、留**碧血**於他年。古直作今、続騷魂於後代」とある。(以上、太字は筆者)⁶

秋瑾はこの物語を用いて、その「宝劍歌」詩の中で「千金市得宝劍来、不恃公理赤鉄」、「**血**染斑斑已化**碧**、漢王誅暴由三尺」と詠んだ。⁷ 彼女は光緒33年に捕まって処刑されたが、張雲華の「鑑湖女侠秋瑾」によると「暴尸七日、女侠既遇害、身首異処、革命**碧血**、凝結黝黒、日曬夜露、気味難聞、終七天七夜、無人敢来収喪」(「死体が曝されること7日、女侠はすでに殺され、体と頭は離れ離れ、革命で流れた碧血は、どす黒く固まり、昼は日に晒され夜は露に濡れ、臭気が漂い、まるまる7日7晩の間、遺体を片付けに来た者は一人もいない)。また秋瑾は斬首されたのち、西湖に仮安置され、墓が新造されて、その上を風雨亭で覆い、墓前に「丹心応結平権果、**碧血**常開革命花」という聯が建てられた、という話も伝わっている。(以上、太字は筆者)

秋瑾の死を哀悼する旧詩は実に多く、例えば柳亜子の「吊鑑湖秋女士」詩に「**碧血**摧残酬祖国、怒潮嗚咽怨錢塘」とあり、龐樹柏の「秋瑾墓」詩に「年年**碧血**痕難滅、寸寸紅心草未刪」とあり、孫文は秋祠のために「鑑湖女侠千古英雄」の扁額を揮毫し、

「江戸矢丹忱、感君首賛同盟会。軒亭灑碧血、愧我今招侠女魂」なる対聯を書いた。秋瑾はまた「干将莫耶」物語の“干将”と“莫耶”の名前を詩に詠み込んだ。例えば「宝剣歌」に「除却干将与莫耶」とあり、「宝剣詩」に「干将羞莫耶」とある。(以上、太字は筆者)

更には、小説の題名「眉間尺」は、発音が“美剣士”によく似ているが(現代漢語のローマ字綴りで、前者は měijiānchǐ と表記し、後者は měijiànsì と表記する)、秋瑾は正しく正真正銘の美剣士、美しい剣客、剣術家、剣法に精通している人であった。他に、上述したように、秋瑾は斬首された後、「身首異処」(「体と頭は離れ離れ」)になったが、“眉間尺”の父親も雄の“青剣”によって首を刎ねられ、国王は「怕他鬼魂作怪、将他的身首埋在前門和後苑了」(「その魂が祟るのを恐れて、体と頭を表門と裏庭に分けて埋めた」)。以上から、秋瑾の形象が“眉間尺”とその父親に投影されていることは、概ね間違いないものと見られる。

実は魯迅は、その初期作品「スパルタの魂」ですでに“碧血”という言葉を使って戦死したスパルタ兵の流した血を表現している(「旭日最初之光線、今也閃閃射壘角、照此淋漓欲滴之碧血」[「旭日の最初の光線が今しもきらきらと石壘の一角に射し込み、淋漓として滴り落ちんとする碧血が照らし出される」])。「眉間尺」では魯迅は“碧血”という言葉を使っていないが、筆者が推測するに、彼は本小説に於て密かに国王に無実の罪で殺害された“眉間尺”の父親が流した鮮血を“碧血”に擬えたに違いない。

“眉間尺”の父親は大王の命で剣を鑄た時すでに、剣を献じた時に自分が死を賜るであろうことを予感していた。実は王妃が“青鉄”を産んだという事実自体が、“青鉄”が3年後に“眉間尺”の父親が流した血を吸って“復仇”の“青剣”となるという運命を暗示しているのである。そして魯迅が晩年に引用した他人の文章の中に“碧血”という言葉が使われている(「后来又聽得広東A君告訴我在兩広戦争後戰士們白骨在野碧血還腥的時候、兩軍主持的太太在香港寓楼時常一道打牌、親昵逾常、這更使我大徹大悟」[「のちに、また広東のA君が私に告げてくれたことだが、兩広戦争後、戰士たちの白骨が野に晒され、碧血の血なまぐさい臭いがまだ漂っていた時、兩軍の司令官の奥方は香港の寓居でよく一緒に麻雀をやり、異常なまでに仲がよかったという。これで私はいよいよ悟った」][紹伯「妥協—『社会』月報八月号を読む」。1935年12月30日『且介亭雜文』「付記」引用])。

『青瑣高議』所収「任願」の影響

青色が関わる中国古典小説というと、宋代の劉斧撰の筆記小説集『青瑣高議』中の、「青巾救任願被毆」(「青巾 任願を救はんとして毆らる」)という副題のある短篇文言志怪小説「任願」(『前集』の四)が挙げられよう。この小説と「眉間尺」とは多くの共通点を持っている。⁸「眉間尺」の出典問題で、これまで「任願」について正式に言及した専門家はいないと思うので、その全文(原文と日本語訳)を以下に掲げる(日本語訳は本邦初訳である)。

任願、字謹叔、京師人也。少常侍親之官江淮間、亦稍学書芸、淳雅寬厚之士。

家粗紹祖業無他図、但閉戸而已、不汲汲於名利。

熙寧二年正月上元、願昼遊街、時車騎駢溢、士女和会、願乘酒足軟、僕觸良人家婦。良人大怒、毆擊交至、願惟以衣掩面不語。毆既久、觀者環繞、莫知其數。有青巾旁觀者忽不平、俄毆良人僕地、乃引願而去、觀者莫知其由。願曰、与君旧無分、極蒙見救。青巾者不顧而去。

異日、願又遇青巾者於途中、召之飲、乃同入市邸。既坐、熟視、目聳神峻、毅然可畏。飲甚久、願謝曰、前日見辱於庸人、非豪義之士孰肯援哉。青巾曰、此乃小故、何足稱謝。後日復期子於此、無前却也。乃各歸。

願及期而往、青巾者且先至矣、共入酒肆、酒十余举。青巾者曰、吾乃刺客也、有至冤、銜之数年、今始少伸。乃於褲間取烏革囊、中出死人首、以刀截為齒、以半授願。願驚恐、莫知所措。青巾者食其肉、無子遺、讓願、願辞不食。青巾者笑、探手取願盤中者又食之。取腦骨以短刀削之、如劈朽木、棄之於地。復云、吾有術授子、能学之乎。願曰、何術也。曰、吾能用藥点鉄成金、点銅成銀。願曰、旗亭門有先子別業、日得一緡、數口之家、寒衣錦、暑衣葛、麗日食膏鮮、自為逾分、常恐召禍、安敢学此、幸先生愛之。青巾者嘆服曰、如子真知命者也、子当有寿。仍出藥一粒、云、服之、百鬼不近。願以酒服之、夜深乃散、後不復見也。

任願、字は謹叔、京師の人。年少期に長江淮水地方で政府任命の役人を務めていた親につき従った。少しく書芸術を学び、純朴風雅寛大丁重な士であった。家は粗末であったが、祖先伝来の家産を受け継いで、他の道を求めることもなく、ひたすら隠棲するのみで、名利に汲々としなかった。

熙寧二年[1069]正月上元の日、願は昼に街に繰り出したが、折しも武人の乗った馬が首を並べて道に溢れ、男女が落ち合って和やかに語っていた。願は酒のせいで足がもつれ、倒れて良民の妻にぶつかった。良民は大変怒って、殴りついたり打ちすえたりしたが、願は黙したまま衣服で顔を覆うだけであった。殴打はいつまでも続き、夥しい観衆が周りを取り囲んだ。傍らで見物していた青頭巾を被った男が突然怒り出し、良民を地面に殴り倒すと、願の袖を引いて立ち去った。観衆は何事かと訝った。願は、君とはこれまで仲間ではありませんでしたが、実に忝なくもお救い頂きました、と言った。青頭巾の男は取り合うことなく立ち去った。

後日、願は再び道で青頭巾の男に遇ったので、酒席に招き、一緒に街中の酒店に入った。腰を下ろして熟視すると、眼は吊り上がっていて顔つきは厳しく、恐ろしいほど毅然としていた。長らく酒を飲んでから、願は、一昨日は愚人に辱められました、豪毅で正義の人でなければ誰が助けようとするものですか、と礼を述べた。青頭巾の男は、これは小さな事件であり、謝意を表されるには及びません、日時を決めて後日再びあなたとここで会うことにためらいはありません、と言った。かくて二人は散会した。

願は約束した日時に出かけると、青頭巾の男は暫く前に着いており、一緒に酒店に入った。杯を十数回挙げたところで、青頭巾の男は、自分は刺客です、冤罪

を被ることがあって、無念の思いを抱くこと数年、今やっと冤罪を少し雪ぐことができました、と言った。そこでズボンの内側から黒い革袋を引き出すと、中から死者の首を取り出し、刀で幾つかの肉付き骨に切り分けると、半分を願に分け与えた。願は恐怖にかられ、おろおろした。青頭巾の男はその肉を余すところなく食らい、願にも勧めたが、願は断って食べなかった。青頭巾の男は笑いながら、手を伸ばして願の大皿に乗っている物を取ると、これも食らった。脳の骨を手にとると、さながら腐った材木を叩き割るかのよう短刀で削って、地面に棄てた。また、私にはあなたに伝授できる術を持っていますが、これを学び取れますか、と言った。願は言った、どんな術ですか。私は薬を鉄に垂らして金に変えられますし、銅に垂らして銀に変えられます、と言った。願は、旗亭門に先祖伝来の別荘があり、毎日銭一貫を稼いでいて、家族は[僅か]数人で、冬着は錦製を着、夏着は葛製を着、うららかな春日には魚や肉を食べていますが、これらは自ら分を越えていると考えており、常に禍を招くのではないかと恐れているので、どうしてそれらを学びましょうや、どうか先生ご自愛下さい、と言った。青頭巾の男は感服して、あなたのような方は誠に天命を知っておられる方であり、あなたは長生きされることでしょう、と言った。薬を一粒取り出し、これを飲めば百鬼も近寄って来ません、と言った。願は酒で薬を飲み、深夜になってから店を出ると、以後二度と姿を現わさなかった。

“青巾”（古代に於て青色の“軟帽”[室内で使う防寒帽]を指す)を被った刺客は「眉間尺」の“黒色人”に、“任願”は「眉間尺」の少年“眉間尺”にそれぞれ相当するなど、この二篇の小説は類似点が多い。1921年2月28日魯迅は張閩声から『青瑣高議』残本一冊を借り受けると、先ず三弟の周建人に筆写を依頼し、ついで自ら筆写し、1923年4月17日に『青瑣高議・前集』（現存鈔本全275頁）を写し終えている。また『中国小説史略』（1923年～1924年）でも魯迅は『青瑣高議』とその所収文について触れている。そして魯迅輯録『唐宋伝奇集』（1927年～1928年）所収の宋人伝奇9篇中5篇が本書から採られている。以上から、魯迅が小説「任願」を読んでいることは明らかであり、彼が小説「眉間尺」を執筆する際に「任願」を参考にしたことはまず間違いなからう。

ついでながら『青瑣高議』の“青瑣”と“高議”について触れてみたい。“青瑣”の原義は皇宮の門扉や窓を装飾する青色の木彫連環花紋であり、広く宮廷や豪華華麗な家屋建築のことをも言う。他に“青瑣郎”（黄門侍郎の別称）なる言葉もある。『青瑣高議』の“青瑣”は、撰輯者の官職（劉斧は獄吏の類）のことではなく、宮廷即ち宋の朝廷のことなのかも知れない。“高議”は卓越した議論或いはおおいに議論をなす意。『青瑣高議』とは、たぶん宋朝に対して（のために）大いに議論をなすという意味であろう。

推察するに、文人としての魯迅は、主として秋瑾のために“報仇”（復讐）するべく、中国の物語で言うと、『呉越春秋』中の「闔閭内伝」、『越絶書』中の「越絶外伝記宝剣」、「列士伝」、「孝子伝」、「楚王鑄劍記」、「列異伝」、「搜神記」それに池田大伍が日訳した「楚王鑄劍記」に基づいて改作した「眉間尺」等の関連作品から取材した他、従来

顧みられることのなかった『青瑣高議』中の「任願」にも留意し、かつまた前述の葛弘の物語をも取り込んで、「眉間尺」を書き上げたのである。

以上要するに、魯迅は本小説の執筆を通して、一人の文人として、秋瑾を初めとする多くの革命と改革の殉難者ために“報仇”（復讐）したのであり、別の言い方をすると彼らの殉難のために“真的紀念”をなしたのであり、一方読者に対しては彼らに武人と文人は如何に“報仇”するべきなのか、如何に“報仇”の思想的準備をするべきなのかを提示したのである。

本篇の完成は、魯迅に長い間実現を望んでいたことがついに実現したという達成感を齎すと同時に、大きな虚脱感をも齎した筈である。そのため、本篇の完成後、魯迅は暫くの間、新しい“新編的故事”を書き継ぐことができなかつた。それは一時新しい小説の題材を見つけられなかつた、つまり新しい“英雄”の形象を見出せなかつたことも、その原因の一つであつたかも知れない。数年後、魯迅は新しい“英雄”の形象を描いた「理水」、「非攻」等を執筆した。

作者補記 本稿は、2001年9月26日～28日に中国浙江省紹興市で開催された“『魯迅的世界 世界的魯迅』紀念魯迅誕辰120周年學術討論會”への提出原稿「『眉間尺』試論——魯迅『故事新編』世界之一」（中国語。李永鑫、陳華建、周幼濤編『魯迅的世界 世界的魯迅（紀念魯迅誕辰120周年學術討論會論文集）』[2002年、呼和浩特・遠方出版社]所収）に補訂を加えたものの日本語訳である。

注

¹ 本稿を執筆するにあたって、日本語資料では丸尾常喜『魯迅（野草）の研究』（1997年、汲古書院）等を、中国語資料では孟広来、韓日新編『〈故事新編〉研究資料』（1984年、山東文芸出版社。『魯迅著作研究資料叢書』之一）等を、それぞれ参考にした。

² 魯迅の“罪の意識”については、拙文「魯迅の『罪』とその変容」（『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』[1986年、汲古書院]所収）を参照のこと。

³ 池田大伍日訳改作の「眉間尺」については、藤井省三「魯迅の童話的作品群をめぐって—『兔と猫・あひるの喜劇・鑄劍』」小論（桜美林大学『中国文学論叢』13[1987年3月]所載）を参照のこと。

⁴ 以上、漢語大詞典出版社版『漢語大詞典』「汶汶」項による。

⁵ 『陳舜臣中国ライブラリー』5『中国の歴史 近・現代篇3・4』（2001年、集英社）3「黎明に燃ゆ—辛亥革命」を参照のこと。

⁶ 以上、漢語大詞典出版社版『漢語大詞典』「碧血」項等による。

⁷ 本注5に同じ。

⁸ 「任願」と「眉間尺」との関係については、中国古典文学専攻の島崎朋子信州大学非常勤講師から啓発を得た。

（信州大学 全学教育機構 教授）

2009年1月8日受理 2009年2月8日採録決定